

五十番歌合

松野陽一

— 近世期歌合の翻刻と紹介 —

近世に入ってから歌合は、もはや文学史は勿論のこと、和歌史の本流をも離れたものであり、ほとんど風雅のすさみといった意識でしか行なわれなかったというのが大方の見解となっている。確かにそのとおりで、広く歌合の歴史を展望して、当代歌合の歌論史的意義を懇切に汲みとって評価している岩津資雄博士の『歌合せの歌論史研究』を参照しても、あまり大きな文学的な意義があったとは考えられない。この評価は、今後ほとんど訂正を要しないとは思うのだが、平安末期から鎌倉初期にかけての豊饒な成果には比すべくもないにしても、この独特の文芸形態に寄せた歌人の関心は、近世に入ってから決して小さくなったわけではなく、古代・中世の和歌の享受の様相を看取れる点など、興味深い点も多い。勿論、歌合の史的研究の正確な評価の為にも看過されてよいわけではないのだが、『歌書綜覧』や『歌合の研究』にも採りあげられないまま、各地に散在している資料は意外に多いのである。文芸作品としての第一次的な価値の低いものに光の当り方の遅れるのはいたし方のない

ことではあるが、そのまゝ烟滅してゆく可能性もなしとしない現況では、機会のある限り、資料として利用し得る状態にしておく必要があると考える。本誌第二号に翻刻した五十嵐篤好判十二番歌合「秋しらべ」はそうした試みによったものであったが、本稿もその意図を承けるものであるというまでもない。そして、今後もできる限り続けてみたいと思っている。

ここに翻刻する「五十番歌合」は、高岡市立図書館蔵の「新編和歌叢書」全四冊（九一・一・一八）の第一冊に収められている。

「新編和歌叢書」（縦二三・四cm、横一六・三cm、料紙楮紙、袋綴）は、歌書集で、第一巻は土御門院百首・順徳院百首・忠度百首・米雅千首・五十番歌合・筆のすさみ、第二巻は建仁元年八月一五夜撰歌合・堀川院艶歌合・難題百首・三体和歌・七夕御会、第三巻は元禄・延享の御会和歌十二種、第四巻は万葉集新採百首等四種といった内容であり、元禄・宝永初年の奥書を持ったものが多い。書写年時、体裁などからみて、江戸中期ごろ順次転写され、集成されたも

のと推定される。ところでこの「五十番歌合」は、精査していないが、元禄丙子（九年）小春仲旬の桑門寂峯の識語に「作者の中にはひとりふたりもしたくしれる方」があるといい、歌を見るたびにその人に逢う心地がするといひ、さらに「老眼」といつているのだから、元禄九年その年かそれ以前の張行で、題が春三題、恋二題という構成から初春のことだったものと思われる。「新編和歌叢書」には、元禄宝永の書写奥書が、寂峯の四種の他に四種あり、それらが全て関係を持つものとすれば、第二巻撰歌合の奥書に鞍馬寺全雄書之とあたりする点から、寂峯も同寺ではないにしても京都の僧であつたのではないかと見られ、さすれば先述の識語と卷末に付けられた所懐とから、恐らく京都在住の人々の催だったのであらう。

判者は、「無名氏」の判詞がかならず無名氏の歌の作意の解説と謙辞的表现とになつてゐることから、この「無名子」であつたことは推定されるが、どのような人物かは全く想像がつかない。しかし、一番判詞の跋文的性格の文章や、判詞全体の書き振り、それに自歌の作意の解説の点から帰納すると、和歌史的・歌学的教養の豊かな人であつたことは容易に推察される。作者達の力量も、かなり豊かな古典に関する教養に根ざしたもので、そこには近世中期以降にみられる擬古的な姿勢はなく、古典和歌の世界と全く継続した意識の中に堂上（風？）の歌風である。勝負付けが無いほか故実によらない点もあるが、なるべく多くの既出の評語を用いてゆこうとしているのがうかがえることなど、なかなか興味のある判詞となつてゐる。

翻刻に当つては、漢字仮名の別をなるべく忠実に写すことに意を用いたが、異体文字変体仮名は現行のものに改めたり、字配りの点などは自由に扱つた。字体が判読できない場合は括弧を用いて傍注し、明らかな欠脱や仮名づかいの誤用は括弧して「マ」と示した。終りに、数々の便宜を与えていただいた所蔵者の高岡市立図書館の方々に心からの謝意を表する。

五十番歌合（翻刻本文）

五十番歌合

題

山霞 夕梅 春曙

忍逢恋 被忘恋

作者次第闡

左 右

慎斎 秀氏

雅懷 又新

道雅 房雄

吉長 守人

無名氏 元英

重好 直順

伊之 友貞

重治 勝尚

政康 重納
行盛 内好

五十番歌合

一番 山霞

左 慎齋

白雲の八重たつ山も梓弓ひきかへ霞む春のゝとけさ

右 秀氏

春は猶都のふしも久堅の雲井に高く霞たなひく

それ此国にむまれていきとしいけるものいつれか歌をよまさり
けるとむかしよりいひつたへ侍ればやむことなきかきりはいふ
にも及はずしつのをたまきいやしきともからにいたるまで歌と
のみ思ひてそそのさましらすとも心をたねとし三十ひともしを
つらぬるほとこの事は何のはゝかりかあるへき中にも難波津の道
のよしあしを左右に分てそのふしゝをえらひあるはそしりを
うけあるはほまれをうるためのしはいにしへよりよゝのみかと
も是をもてあそひ給ひ此道をこのめる家々の歌合もよりゝに
たえずそありけるさてそのまさりをとりをことほる人は堪能先
達の中にも類まれなる事に申つたへ侍るめりしかはあれとその
人ゝのえたる所えぬところをいはん事たとへは珠玉の妙なる
もくらへて見は又えらへる光りもあるへく瓦礫のつたなきもな
らへていはゝ猶すたれるたくひもわかたんその珠玉のたへなる
ひかりはたへなる道をしれらん人のしりかの瓦礫のつたなきた

二番

左 雅懐

山高み今一しほの春の色を霞こめたる峰の松かえ

右 又新

けふいくかきたかならぬそたちそめて明くれ霞む遠の高根は

左の歌今一しほの色まさりけりといへる歌をとりて山高みと置
峯の松かえといひはてたるさもあらんかし右又立そめしよりあ
けくれかすむをちの高根もことほりぬへくこそ又持なるへし

三番

左 道雅

きえかての雪を霞の立こめて花にそたくふみよしのゝ山

右 房雄

今いくか咲出む花の面影も霞の底に遠近の山

両首ともにおなしほとに風躰よろしく侍れは持たくさんに侍れ
といまた勝負をえこそ見わけ侍らね

四番

左 吉長

出のはる春の日影もわかぬ迄ふかくそ霞む遠の山のは

右 守人

かすみゆく四方の山の端見渡せは松の緑や色をますらん

右の歌霞の色を松のみとりにそへたるといへるにやさもあるく
けれと二番の左に霞こめたるはよく聞え是は聞えかね侍る歎左
の歌初の五文字耳に立侍れと下句よろしくきこえ侍る仍以左為
勝

五番

左 無名氏

麓よりかゝりそめてや生のほる山を雲井に猶かすむらん

右 元英

たちそめし霞衣日にぞひて八重かさなれる遠の山く

左の歌古今の序の高き山もふもとのちりひちよりなりてあま雲
たなひくまておひのほれるなとゝいへるあたりを思ひやりたる
斗にてことなる作意も侍らす右勝侍りなん

六番

左 重好

晴まなき越の白山いつしかに雪け忘れて霞たなひく

右 直順

山の端に霞の衣いくへとはのとけき空の春やかさねし

左の歌こしのしら山の雪氣を忘れたるなと作意あるやうに聞え
侍る右の歌のとけき空の春やかさねしといへる聊心ゆかぬやう
に侍れは左可為勝

七番

左 伊之

浪ならて又もありとや春霞立こえぬらん末の松山

右 友貞

杉村のみとりもわかす春くれは霞そたてる逢坂の山

右の哥上ひひかなへたるやうに侍れとふるめかしく聞え侍り
左の哥此山にいひ副たる浪を霞にとりかへて立こえぬらんはお
かしく侍れと哥からおもはしからす勝負不分明歎

八番

左 重治

いつしかに雪けの空をたちかへて山は霞の衣きぬらん

右 勝尚

遠近の山のはみせてうすくこく霞そほとをたちへたてける

左の哥よくいひ叶へては侍れとふるひはてたる霞の衣にや右は

作意ありけに聞え侍れと歌の姿優にしも見え侍らすなぞらへて
又持たるへし

九番

左 政康

朝ほらけ打出て見れば山くの遠近分る春霞かな

右 重納

天の原いつくともなく立そめて山の端遠くかすむ春哉

左の哥中の五字より遠近わくるといへる詞迄耳に立やうに侍れ

と霞の色の遠近をわくる才覚よくいひ叶へては侍る作意は前の

つかひの右の歌にことなること侍らぬにや右の歌からやすらや

すかには聞え侍れと上の句おほつかなく題の心をろかにや侍ら

ん左の霞いさゝか立まさるへくや

十番

左 行盛

葦引の山より山を立こめし霞の衣いくへなるらん

右 内好

朝ほらげしかもかすむか三輪の山しるしの杉も見えわかぬ迄

左の歌よくつゝきてはきこえ侍れと八番の左の霞の衣より猶ふ

るくや右はしかもかすかかよめるをしかもかすむかといへる

はいさゝかはたらきたるやうに侍れと春くれはしるしの杉も見

えぬ哉霞をたてる三輪の山もとと云歌にかはる所なくやらん持

なとにや

十一番 夕梅

左 行盛

夕の暮おほつかなきを春風のさそふたよりに匂ふ梅か香

右 房雄

咲初て袖に馴ぬる梅かゝも猶またるゝや春の夕かせ

両首ともにさせる難も侍らねとめつらしからぬ事ともなるへし

されと右はすこしまさるへくや

十二番

左 政康

それとこそわきては見えぬね梅花ほのくかほる春の夕暮

右 又新

夕附日まやの軒端に入残る影さへ匂ふ梅の下かせ

左の歌暮ふかくして花の色さたかならねとほのくかほるにて

かゝをしるといへるはさもあるへくきこえ侍れと例のめつらし

からぬ事にや右の歌は思ひ入たるやうに侍れはまやの軒端勝侍

りなん

十三番

左 重治

咲つゝく墙根あまたの梅かゝをもたらさてさそへ春の夕かせ

右 直順

梅花あかぬ色かは今しはし入撰の鐘に猶匂ふ也

左の歌垣根あまたといふよりもらさてさそへなと心詞よくいひ
おほせたるやうに聞え侍る右は梅花あかぬ色香も昔にてとよめ
る名歌の一二の句おなし所にをき下の句の心なともおほつかな
く侍れば左尤可為勝

十四番

左 伊之

玉簾ひまもとむなる夕風にこほれて匂ふ露の梅かゝ

右 元英

月影に色はかはらて梅花匂ひをそれと春の夕風

左の歌ひまもとめつゝ入へきものをとよめる歌をとないにせる
にや下の句なとこによろしく侍る右は月影に白梅の色のまかひ
つらんは聞え侍れと下句よろしからず左可為勝

十五番

左 重好

夕風のさそひてきぬる花の香は籬に近く梅や咲らん

右 守人

夕暮の軒端にかはる風はあれと見ぬ色おしき宿の梅かえ

左右ともに同等にして勝負ことはりかたし

十六番

左 無名氏

啼くらし籬の鳥の寝にゆくをしはしと匂へ庭の梅かゝ

右 友貞

夕霞なをさりならぬ梅かえのあかね色をしたちなへたてそ

右の歌なをさりならぬの詞こゝにてはいひおほせたりとも聞え
侍らず左は鳥の音も梅かゝもしたふ心にかくよみ侍る也されと
よろしくも侍らねは右勝侍りなん

十七番

左 吉長

咲出て紅にほふ梅かえに猶色そふる夕日影かな

右 勝尚

白妙に咲にし宿の梅かえもくるゝや色のうつるとをみん

左右ともに紅白の梅花色くにしていつれもよくきこえ侍れと
暮るを色のうつると見むよりは夕日影に色そふは猶詠まさるへ
くや

十八番

左 道雅

あけは見む野辺の梅か枝咲ぬとてかこそはさそへ春の夕かせ

右 秀氏

梅匂ひそしるき夕暮の籬は山の雪と見なから

左の歌野梅の咲比夕かせのたよりをえて明は見んとよめる心詞
さそと聞え侍るうへ右の歌夕暮の色は山と見えなゝんと云歌を

よくとりおほせたりともきこえ侍らねは又以左為勝

十九番

左 雅懐

夜のほともおほつかなさに袖ふれて梅かゝうつす春の夕暮

右 内好

あしかきのま近く植し梅かゝはさそはずとも春の夕風

左の歌夜のほとゝいへる詞よろしからぬにや右又下の句よくつゝきても聞え侍らすなそらへて持とすへし

二十番

左 慎斎

宿近きおりかけ垣に咲梅の木陰やしはし暮残るらん

右 重納

植をきし心やしりて夕風の匂ひをくくる窓の梅かえ

左の歌おりかけ垣にさく梅の木陰のみ暮残りたるは花さかりのさこそ白妙に侍りけめ右の歌うへ置し心やしりてといへるもお

かしく聞え侍れは猶よき持にや

二十一番 春曙

左 道雅

をのつから花よりしらむ山のはを立わかるゝや横雲の空

右 重継

入月も花の梢やしたふらん影また残る春の曙

左の歌をのつから山の端を花にしらまれて立わかるゝや横雲の空といひはてたる迄心詞よくとのほりたけありてきこえ侍る

右の入月も花の梢をしたふんにや影また残るといへる婆詞又あしからす侍れと歌にていはゝ横雲の空猶立まさりてこそ覚侍れ

二十二番

左 慎斎

春の夜の空はそこともわかぬまに花の色より月を明行

右 房雄

半天にやすらふ月の名残まで歌はてたる春の曙

左の歌下の句はあしからすきこえ侍れと上の句までにおほつかなくや右の残月は見所ありて明ほのゝ気色よくいひおほせ侍るうへ歌の姿もたけあるやうにきこえ侍れは以右可為勝

廿三番

左 無名氏

めてゝこし色より香よりおりにあふ心の花の春の曙

右 又新

しめ置しねくらをよそに鶯の木つたひ出る春の曙

心の花の沙汰よりねくらをいつる鶯おかしくや侍らんまされかし

廿四番

左 吉長

春の夜の月の名残もかすむより影遠さかる曙の空

右 直順

世の人の千々になかめをつくすとも詞のこらん春の曙

左の歌月の名残もかすむよりといへる所を下の句にてよくこと

はりたるにや姿も優にこそ侍れ右の歌此曙には世の人のいかに

詞をつくすとも及ふましきといへる理にをひてはよく叶ひて侍

る風情すくなく侍れは以左為勝

廿五番

左 重好

影かすむ月夜よりけによし野山花の梢の曙の空

右 元英

いつはあれとしめてそおしき月影の花に別るゝ曙の空

右の歌あたらしくは侍らねと月影の花に別るゝ曙の空といへる

あたり見所ありておほえ侍る道もいひおほせたるやうには侍れ

と二句なとおもはしからす仍以右可為勝

廿六番

左 重治

天の原ふりさけ見ればほのゝと霞渡れる春の曙

右 友貞

浪風の首しも春はなには舟霞を分る浦の曙

左の歌一二の句といひ中の五字といひかくれなき事ともに侍れ

はおとなし過侍らんされといひつゝけたる下の句にいへる詞は

さもあるへし右の歌はひとへに海路のやうにのみきこえ侍れと

景氣やさしくや同等なるへし

廿七番

左 政康

いつ迄も心に残れ足曳の山の端霞月の曙

右 秀氏

思ひ出ることとはあまたに有明の月も昔に霞む曙

両首ともに名人の詞をへつらひたる外に作者のものと思えたる

所も侍らねと思ひ出る事はあまたになとすこしはまさるへくや

侍らん

廿八番

左 行盛

筆にしも花と月との面影をうつしもとめよ春の曙

右 勝尚

いかにしてかたりつたへん住の江の海辺かすめる春の曙

左の歌花と月との倂をうつしもとめよといへるはさもあるへく

聞え侍れと春の曙俄にや侍らん右の歌雁啼て菊の花さく秋にも

まされる此浦の春の詠には侍れと姿よろしく侍らす持とすへし

廿九番

左 雅懐

いつくよりしらむともなく月影の霞に残る春の曙

右 守人

影もまたかすみ残りて有明の月に別るゝ峯のよこ雲

両首ともに残月の曙左はいつくよりしらむともなくといひ右は

月に別るゝ峯の横雲といへる詞つかひいつれも優艶にして全勝

劣あるましきこそ

三十番

左 伊之

一とせのいつはありともみよしのゝよしのゝ花に春の曙

右 内好

花鳥をめてうらやみて我宿も立こそいつれ春の曙

左のよしのゝ花の春の曙はまことにいつはありともすくれて艶

に侍らんかしされと哥にをひてはさしてめつらしき所も侍らぬ

にや右の哥花をめて鳥をうらやみといへる詞にもとつき侍ると

は□□きこえ侍れと我宿の立出やういさゝかおほつかなかく聞え

侍る持とすへし

三十一番 忍逢恋

左 雅懐

人めもる心の関のひまなるにあひみても猶哀世中

右 房雄

あすは世に憂名もよしやたてはたて逢を命のかきりとへは

左の哥あひ見ても猶哀世中といへる彷彿に侍るを右の下の句も

心ゆきても聞え侍らず猶持にや侍らん

三十二番

左 道雅

いくたひか忍ひわひつゝしほりこし袖の涙をこよひほすらん

右 守人

人しらはつれなからまし我袖の涙よこよひ色に出しな

左の哥袖の涙をこよひほすにて忍ひわひつゝ逢といふは題の心

もたしかに姿もあしからず聞え侍る右は一二の句心ゆかぬやう

に侍る忍ひあふ比しも傍人のしり侍らはつれなくなりてあひこ

ともえせしとにや心あまりて詞たらぬにてや侍らん左は難なく

侍れば尤可為勝

三十三番

左 吉長

人しれぬ心のうちの忍ふ草あふ夜はいかに露けかるらん

右 元英

いかにせんもれてあふせのあすは世になかるへき名も任他

左の忍ふ草心のうちにおほるやうにもよまん事いかれぬにはあ

らさるへしされと忍ふ草のあり所耳にたつやうに侍るにや下の

句はよろしかるへし右は詞つかひいひへたてたるやうにはきこ
え侍れと初の五字末までよく叶ひていひおほせたる哥にては侍
るへしなかるへき名もといへるを聊つまりたるやうに侍れと難
すへきにもあらざるか仍以右為勝

三十四番

左 無名氏

あめもしれ神もあらはやふたりたにかゝるかことを世にし忍はゝ
年月を忍ひかへして恋交うらなくこよひかさねぬる哉

右 直順

左の哥想震の四知をおそるゝ古事をむねとしてふたりたに世に
もらさすは天しり神するはいとはしと作意をつけ侍れとことは
りかたくや右勝侍りなん

三十五番

左 重好

思ひやれ忍ふうき身のかなしきは逢うれしさもい^こわてやみを

右 友貞

人しれす逢嬉しさにさき立て忍ふにも似ぬ我涙かな

左の哥忍ひてあふ夜はうれしさもいはてやみぬれはさそと聞え
侍れとうきといひかなしきといへる打まかせては病ならん歎右
の哥下の句聞馴たるやうには侍れとさしあたりて覚悟し侍らす
哥からよろしきに似たり右勝侍りなん

三十六番

左 伊之

わたつみのおきをふかめて忍ひこしつらさいふにそ袖に浪こす

右 勝尚

忍ひつゝ待夜つもりてあふとこそ床も枕もこよひしるらめ

左の哥古今のなかうたをとりもちる一二の句となし年月忍ひこ
しうさを逢見ていふにも袖に浪こすといへる首尾めつらしく思
ひよれるに右又忍つゝ待夜積りてあふを床や枕にしられける哀
ふかくや侍らん枕のしるといへる事はふるくもおほくよめれと
床も枕もしるらんといへる作意いとおかしく聞え侍れは左右に
まさりをとりはあるましくこそ侍るめれ

三十七番

左 重治

恋くゝてかはす枕のうれしさもつゝむうき名にけに思ひ哉

右 重納

恋しなて逢うれしさにくらふれは忍ふうき名もよしや世中

此両首のうれしさいつれもさそは侍らめと思ひやられ侍る中に
も左のうれしさより右のうれしさは逢にまさりてこそ聞え侍れ

三十八番

左 政康

忍ふ山つねにそこえしもる人の打ぬるひまを通路にして

右 内好

打とけて逢夜もくるしあちきなく世にもらさしのちかひのみし
て左の哥よひくことに打もねなくんと云哥と忍ふ山忍ひてか
よふ道もかなといへる哥を心に思へるにや打ぬるひまを通路に
してといへる詞優艶にして哀もふかく作意ありてきこえ侍るに
右の哥世にもらさしのちかひのみしてとよめるは新道花麗とも
いひつへくるぞ打とけてあふ夜もなしと何となくいへる詞さへ
下の句にひかれてやさしく聞なし侍れば左右の哀にもよほされ
て勝負をはえこそさたし侍らね

三十九番

左 行盛

よそにのみもれんうき名を忍ふれば逢見ても猶ことのはそなき

右 秀氏

今は猶みたれそまさるあひみてももれんうき名を忍ふもちすり

左はもれんうき名を忍ふとてあひみても猶ことのはそなきとよ
めるもいひたらぬやうにきこえ右は忍ふもちすりといはんとて
みたれそまさるとよめるも忍ふ心のさやは乱るへき左右は同等
の事なるへし

四十番

左 慎斎

人しれぬ夜半のむつこと世にもれはつけの枕やそれとかこたん

右 又新

かくはかりしけき人めの通路もとくる心に関守そなき
右の哥誠に人しれぬむつことの世にもれつけの枕ならてはとう
たかひ思へるもおかしくこそ侍れ哥から又あしからす右の哥下
の句はめつらしく侍れと上の句をとりて侍るへし以左為勝

四十一番 被忘恣

左 無名氏

生れ行てかはる心のこん世にや忘るゝ人を我もわすれん

右 勝尚

名残なく忘れはてゝや夢にさへ見えぬつらさをいかに歎ん
左の哥隔生即忘といへる仏説にもとつき忘れし人を同し世に我
は忘れかたき心よりかくよめる也右は名残なく忘れはてゝや夢
にさへ見えぬとかこちいへるさま哀に侍る勝侍りなん

四十二番

左 重好

忘れし人のことのは朽はてゝ我身の秋そ独かなしき

右 又新

数ならぬ身をはなけて忘行人のつらさをなにくらむらん
左の哥忘れしといひしことのはも朽はてゝといふよりわか身の
秋といひ独かなしきといへるも忘れはてし後の思ひをことは
れるさまいとやさしくこそ右の哥も数ならぬ身をはなけて忘

るゝ人をうらむるよしよくきこえ侍る哥から又あしからすされ
と左の下の句猶哀にきゝなし侍ればわか身の秋におもひつき侍
るへし

四十三番

左 伊之

忘草おふる身となと成ぬらんわれ住吉になかぬせしかは

右 直順

忘れん身をもしらてゆふたすきかけしかことの今はくやしき
左の哥住よしとあまはつくともなかるすなと云哥をそ本哥とし
てよめるとは聞え侍れと上の句よろしくもきこえ侍らす右の哥
も逢見てしそのかみにゆふたすきかけしかことはいのりてあへ
るといへるにやちかことせしにやおほつかなく侍る持とすべく
こそ

四十四番

左 重治

見し影を又もうつさて忘水なかれはたえぬ袖の白浪

右 守人

影うつす人こそなけれ忘水あかさりしよりたえし契は

左の哥上の句はよろしくいひかなへて侍るに袖の白浪を忘水に
にあひてもきこえ侍らす右の歌も下の句いひおほせてもきこえ
侍らす又持とす

四十五番

左 政康

数ならぬ身とやはしらて契こし今さら人のなと忘るらん

右 元英

忘れぬる人よりもけにつらきこそ猶なからふる命也けれ

左の歌数ならぬ身とかねてしられし中を今さら忘るゝはいかに
そやと恨いへる心よく聞え侍る右の歌は忘れぬる君は中くつ
らからて今までいける身をそうらむると云歌にことなる事なく
きこえ侍るうへ二の句つまりたるやうに侍れは以左為勝

四十六番

左 行盛

人を思ふ事もならはぬつれなきに忘るゝ心たかをしへけん

右 房雄

ちかひてしことのは今はかへせとは忘るるゝ身のなに思ふらん

左の歌またしらぬ事はいかゝをしふへき人を忘るゝ身にしあ
らねはとよめる歌などを土たいとせるにやいひおほせにはあ
らさるへし右の歌ちかひしことのはも思はて忘れぬる人をかこ
ちてそのことのはをたにかへせと忘るるゝ身のおもへるははか
なきよしをよくいひおほせめつらしく思ひよれるにこそ歌の姿
も左より遙に立まさりて聞え侍れは尤以右可為勝

四十七番

左 吉長

をろかさは袂をくたす涙哉忘るゝ人をまたこふるとて

右 友貞

あるかひもあらぬ命のなからへて忘らるゝ身そ今はつれなき

両首ともよくいひかなへては侍れと共にさしてめつらしく思

ひよれる品も侍らねはおなしほととの事なるへし

四十八番

左 道雅

いかにしてたれにかたらん忘れ行人のつらさのつらき思ひを

右 秀氏

うきなからいかにしらせん忘水わすれて猶たえぬ思ひを

左の歌忘れしつらさをたれにかたらんよしもなきといへるは

さる事に侍れとそれまでの事にや右の忘水も立かへりたえぬ思

ひをしらするよしもかなと思へるはさそときこえ侍れと初の五

字末までひゝきてもきこえ侍らねは難なき左にや勝と云字を付

るにても侍らん歎

四十九番

左 雅懐

歎きてかひやはあらんちかひてし命思はて忘れはてなは

右 重納

忘れぬる人の情のありしよをわかなくさめに忍ぶはかなさ

左の歌まことにちかひてし人の命のおしくもあるかな忘らるゝ

身の思へるとも人の心ははかりかたく侍れは歎きてもかひやは

あらんといへる哀にこそ侍れ右の歌もあしからずは侍れと姿や

をとり侍りなん仍以左可為勝

五十番

左 慎齋

なとてかく忘れ果しいきて世にかはしとこそいひし契を

右 内好

かはらしとちかひしほとの身をしらていかにはなく忘れはてけ

ん

此両首かはらしといひしも忘れはてしあた人たちを共にこふる

ともかこつともかひあるましきことよりは左の方人やすこしい

ひまさり侍らん

右五十番歌合の作者の中にはひとりふたりもしたしくしれる方

のあるなれば其詠作の風情を見るたひに其人に逢心ちし侍れば

打すてかたくて老眼を拭愚筆を染ものならし

于時元禄丙子小春中旬

桑門寂峯筆之

折からとりあへず

頼むそよ若の浦路の友千鳥あしまかくれに年へぬる身を